

経済だけでは回せなくなった森とそこにある地域を、豊かに持続させていくにはどうすればいいのか。前章でもふれたように、人材育成の場が生まれています。森での取り組みはめぐりめぐって、わたしたちの暮らしにも繋がっています。

### 新たな森林管理の時代がきました

## 奈良でフォレスターアカデミーを育てます

奈良県フォレスターアカデミー 校長 藤平拓志

### 森と人間が争わずにすむ道はないのか

最近テレビで、宮崎駿監督の「もののけ姫」を久しぶりに見ました。主人公の若者アシタカが森に棲む犬神モロに対して「森と人間が争わずにすむ道はないのか」と問いかけるシーンがあります。また、同じくアシタカがハンセン病患者など社会のマイノリティーを受け入れる人徳を持ちつつ、森林破壊をしながら鉄を作るタタラ場の長であるエボシ御前に対して「森とタタラ場、双方生きる道はないのか」と問いかけるシーンがあります。

環境と経済（人の生活）の両立の困難さが伝わるシーンでした。私自身、大阪府や兵庫県の都市部で育ちながらも、昆虫や小動物を捕まえては飼育するのが大好きな少年でした。自然に興味のあった私は、大学では林学とい

う分野を学びました。私の思想の根底にも人と自然の関係性についての問題意識があるようです。だから、アシタカの苦悩に共感したのでしよう。

### アカデミーは何のため？

さて、本題です。2021年4月、奈良県吉野郡吉野町に「奈良県フォレスターアカデミー（以下、アカデミーという）」という新たな森林環境管理の担い手を育成する学校が開校しました。吉野林業という伝統的林業地において、「新たな森林環境管理」を掲げるの開校です。何のために？ それは、開校に至る経緯と学校について説明します。

全国の林業地域と同じように、奈良県でも、従前は適正な林業活動が行われ森林環境が保全されるという予定調和的なバランスが保たれてきたのですが、長引く木材価格の低迷などから森

## 森林と人が豊かに共生するには

林を管理する林業者の意欲が激減しました。同時に、森林所有者が世代交代することで所有山林への関心が低下したり、森林管理を生業とする「山守」の高齢化及び後継者不足などの課題もありません。

こうして、森林の適正な管理が行われず、森林環境は悪化し、森林の有する多面的な機能が十分に発揮出来ない状況に追い込まれています。特に、防災機能の低下については、未曾有の豪雨をもたらし2011年の台風12号により、痛感したところで。

このままではいけない。対症療法ではなく、抜本的に、将来へ繋がるような新たな森林環境管理の仕組みはないものか。このあたりから始まりました。

### 「持続可能」とは環境負荷を認めバランスをとること

森林の管理は経済活動に任せてはいけない事は、現状をみる限り明らかです。このことから、新たな森林環境管理のためには、「施業管理」という林業を中心とした従来の森林管理に加えて、「環境管理」という森林の持つ多様な機能をバランス良く管理する仕組みを付加することが求められました。アカデミーは、この仕組みを担う人材を育成するという役割において必要でした。

アカデミーで育成する人材について、やや詳しく述べてみたいと思います。市場原理主義をベースとしたワールドな資本主義においては、大量生産・大量消費を基本とする社会経済となり、地球環境に対して多大なるダメージを与え続けることとなります。結果、地球環境の歪みは大きくなってきています。世の中の歪みが、社会的弱者から大きく影響してくるようになり、地球環境の歪みは、生態系の弱いところから影響が現れてきます。

SDGs が流行語のように使われるようになってきましたが、「持続可能」は決して環境への負荷がゼロということではなく、人類の存在自体が、地球環境にとって負荷であるという事実は否めません。それでも、我々は生

きていくしかない。その妥協点が「持続可能」だと考えます。

それを踏まえて、森林環境管理はどうあればよいのでしょうか。奈良県では先人達の不断の努力により育まれた吉野林業があり、また、日本全体を俯瞰してみても、その時代背景や自然条件、当時の技術レベル、社会的要請などに対応するため、多くの人の努力によって課題に取り組み、紆余曲折を経ながら森林を絶やすことなく現在に引き継いできたという現実があります。結果が見えている今の目線からするとそこに誤りが含まれているように見えたとしても、過去に対して批判する事は誰にでもできます。しかし、批判だけでは何も変わりません。

「将来」の人類から評価を受けるためには、「今」何をすべきかを考えて対応していくことが必要です。

### 森林の声を聞く

将来を見据えた森林環境管理において、その表現形は多様に富んだものになるでしょう。けれども、その思想・哲学は、ある一定共通したものがあるはず。

持続可能な森林管理、持続可能な森林経営、持続可能な林業経営、簡単に言えば、国土保全（山を崩さない）、森林生態系保全（公益的機能を維持する）、地域社会の維持（生業としての

## 森林の声を聞き取り、対応する知識と技能を

継続性を保つ。そのためには、環境の歪みを森林の声として聞き取り、理解し、対応していく。いくら科学が進んでも、自然の摂理を全て解明できるわけではありません。自然に対する畏敬の念を忘れる事なく、我々は謙虚に自然との折り合いをつけながら生きていくほかありません。自然と折り合いをつけることが出来る人材。アカデミーはそれを可能にする人材育成を目指しています。

### これからのフォレスター像とは

調べ尽くした訳ではないのですが、一般的な林業学校では、いわゆる林業主にスギやヒノキなどの林業樹種による人工林施業に必要な知識と技術・技能の習得を目指しているのではと思えます。

アカデミーではそれも踏まえつつ、まずは、林業という生産活動（作業道の作設なども含めて）をすることで、かえって林地崩壊が発生し、人命を奪うようなことがあってはならないという大前提に立ちます。そして将来世代の人類のために今ある自然を保全、もしくは更に豊かにするような生物多様性保全の視点から森林全体を把握し、その地域の住民達と話し合いながら、スギ・ヒノキにこだわらず地域樹種の広葉樹なども取り入れた多様な森林づく

くりに向けた取組ができる知識と技術・技能の習得を目指しています。

アカデミー開校の前提となる新たな森林環境管理の仕組みは、海外、特に中欧のフォレスター制度を参考にしました。中でも、奈良県が大いに参考にしたのがスイス連邦の仕組みです。ここでいう「フォレスター」とは、役職の名称であり、日本語に訳すと森林官とか森林管理官とかになります。社会的立場づけとしては、準公務員的な人材として、森林管理に関する一定の権限を州から付与され、健康な森づくりに取り組み、同じ地域の森林を終身若しくは長期にわたり経営管理していく人材です。具体的には、地域のキーパーソンとして、作業道の作設から森林所有者とマーケットの橋渡し、加えて生物多様性保全の活動など、かなり多岐にわたる業務をこなしています。もちろん、所有者や地域住民の合意形成という大事な業務もあります。

### 長期にわたり愛着と責任をもって

奈良県でも同じ地域の森林を、地域住民の信頼を得ながら愛着と責任をもって長期にわたり管理するという仕組みを取り入れることになりました。

これは、アカデミーの学生のうち、森林管理職という県職員として学ぶ者や、アカデミー在学中に森林管理職の

採用試験に合格した者が「奈良県フォレスター」という資格をもって担うこととなります。

しかし、奈良県フォレスターはスーパーマンではありません。奈良県フォレスターが一人ではがんばっても豊かな森づくりはできないのです。やはり、実際に森づくりの作業を行う者や、地域の方々、関係者の方々からの協力・支援・連携などがあって初めて出来るものであり、そのような仕組みの中にあって、フォレスターの本来の価値が発揮されるのです。フォレスターを生かすも殺すも、彼らを受け入れる社会次第とも言えます。これを読まれているあなたも、彼らと一緒に豊かな森づくりに取り組みませんか。



奈良県各種専門分野の行政職に携わり、2017年より「新たな森林管理体制準備室」にて奈良県フォレスターアカデミー創立に向けての準備に従事。2021年より校長に就任。地球環境危機の時代における人と自然の関係性を問いながら、人材育成に情熱を注ぐ。野生動物の生き様に哲学を感じる「酒好き」。